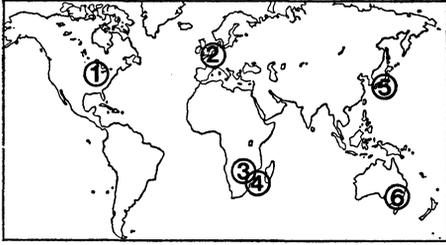


世界の異常天候とその影響評価 (3)

(Climate Impact Assessment, December 25, 1983–January 7, 1984)

(Climate Impact Assessment, January 1984)



1. 北米——低温から高温へ変化

北米の大部分では12月の最後の週から1月の初めの週にかけて、異常な寒さから異常な暖かさへ急激に変化した。カナダと合衆国の平原の大部分では 15°C 以上も気温が上昇した。それにもかかわらず、12月後半の強い寒波による資産の被害や死者は多かった。報道機関の伝えるところによれば、合衆国では、少なくとも430人が寒波に関連した原因で死亡した。

非公式筋によれば、かんきつ類と野菜の被害は2億ドルに達しており、水道管の凍結やこれに関連した被害も数億ドルに達した。

そのうえ、合衆国では、低温のため、住宅用と商業用の暖房費が18億ドルも増加した。なお、人口の重みをつけて計算したデグリー・デイの統計によると合衆国では最近53年間で二番目に寒い12月であった。

その他の影響としては、水面の凍結のため、はしけの輸送が滞ったことや、低温と風雪のため、小売業の売り上げが低下したことなどがある。

北米——寒波

カナダと合衆国では、1月18～22日に厳しい寒波に襲われ、数多くの低温の新記録が生まれるとともに、多くの人々が死亡した。カナダ南部と合衆国北部の気温は -40°C にまで低下した。1月21日には、テネシー州やアーカンソー州のような南部でも -18°C 以下に低下し、この日1日だけで合衆国の低温記録が50以上も破られた。報道機関の伝えるところによると、合衆国では酷寒のために少なくとも42人が死亡した。

2. ユーラシア——高温

12月後半の2週間に、アメリカが初冬としては記録的な寒波に襲われていた頃、ヨーロッパでは平年より $4\sim 7^{\circ}\text{C}$ も暖かかった。この温和な天候のため、西ヨーロッパと東ヨーロッパ(ソ連を含む)では燃料の需要がかなり低下した。

一方、冬の行楽地にとっては雪の状況は好ましくなく、アルプスなどの山岳地域ではスキーをしにくくなった。

1月の初めには、西ヨーロッパの天候は寒くなって季節相応の気温となったが、東ヨーロッパは依然として異常な暖かさが続いた。

ヨーロッパ——強風・大雪

1月中に一連の暴風雨(雪)がヨーロッパ北部を東方へ通過し、多くの死者を出した。被害が最も大きかったイングランド、スコットランド、アイルランドでは、吹雪のため少なくとも49人が死亡した。グレートブリテンでは、1月2～3日に襲った暴風雨(雪)によって、風速 160 km/hr (約 44 m/s)を記録した。1月12～16日の吹雪では、イギリスで少なくとも22人が死亡した。このうち、8人は鉄道事故による死者であり、3名は登山中の遭難者である。1月21～22日の激しい吹雪のため、スコットランドとイングランド北部では積雪が 48 cm に達し、道路が封鎖され、鉄道交通が妨げられた。さらに1月23～24日の暴風雨(雪)では、イギリス海峡で貨物船が転覆し、少なくとも15人が溺死した。

3. アフリカ南部——干ばつ

アフリカ南部の数カ国では、12月と1月の干天のため、農作物と牧草が被害を受けた。このため、潜在的な食糧不足が年を越えて続くことになった。この地域での12月末から1月末までの降水量は、平年の五分の一ほどである。

3年続きの干ばつとなったボツワナやジンバブエ南部では、農作物が危機的状況にある。

4. モザンビーク、スワジランド、南アフリカ共和国—— 熱帯低気圧

熱帯低気圧 Domoina が、1月28日にモザンビーク南部の海岸を襲い、100 km/hr (約 28 m/s) の強風と高波と洪水をもたらした。報道によれば、南アフリカ共和国、スワジランド、モザンビークでの洪水による死者は少なくとも 139 人に達した。

影響の及んだ地域の降水量は 150~250 mm である。モザンビークでは、洪水と以前の干天の影響で食糧不足の恐れが強まっており、飢饉にみまわれた地域の救済活動も、この洪水によって妨げられた。

5. 日本——大雪

大雪が2回あって、道路と空の交通機関が立往生した。1月30日には、東京地方で 20 cm の降雪があり、

東京空港は12日間で2度目の空港閉鎖となった。大阪でも 18 cm の降雪があったが、これは最近 77 年間の最大値である。

6. オーストラリア——大雨・洪水

オーストラリア南東部では、150~300 mm に達する大雨のため洪水が発生した。

非公式の報告によれば、多雨のため 400 万トンの小麦(農作物の 1/5) が被害を受けた。

(注：上記各項目の番号は図中の番号に対応している。なお、1984年から Climate Impact Assessment は月2回から月1回の発行に変わっている。)

(気候変動対策室 真野裕三)

日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
日本気象学会昭和59年春季大会	昭和59年 5月23日~25日	日本気象学会	気象庁
第20回理工学における同位元素研究発表会	昭和59年 7月 2日~ 4日		国立教育会館
第10回国際生気象学会議	昭和59年 7月26日~30日		順天堂大学有山記念館・医学部
Twelfth International Laser Radar Conference	1984年 8月13日~17日	Int. Radiation Commission (IRC) Committee on Laser Atmospheric Sensing (CLAS)	Aix-en-Provence, France
第2回エアロゾル科学・技術研究討論会	昭和59年 8月23日~25日	エアロゾル研究協議会	京都堀川会館
第8回風工学シンポジウム	昭和59年12月 6日~ 7日	日本風工学会ほか	気象庁講堂